近代語資料における校訂の問題と資料性

――坪内逍遙『一読三歎当世書生気質』の場合――

増井典夫

一、はじめに

古典語を研究する場合に、信頼できる資料を得るために諸本の検討を行い、最善の校文を求めることが必要とされることはいうまでもない。では、近代語の場合はどうであろうか。

明治前期の口語資料として重要性が高く、大変多く使われるものの一つである『一読三歎当世書生気質』の場合、『明治文学全集』の解題に「初刊本によって収めた」とあること、初刊本が気軽に手に取って見られるものではないこと（しかるべき図書館に行って手続きすればよいのであるが）等々の理由によって、一般には『明治文学全集』所収の本文によって調査考察が行われている。(1)

しかし、今回、初刊本と『明治文学全集』所収のものとの照合を行ったところ、決して見過ごせない相違が見つかり、『明治文学全集』のものは「初刊本によって」はいても、「初刊本そのままではない」ことがわかった。本稿では、その点について述べていきたい。

二、『当世書生気質』の諸本について

『当世書生気質』には初刊本の形態のもののほか、著者自身が「誤脱、衍字、仮名ちがひ、句読の誤り等までも訂し」たとされる『逍遙選集』及びそれによるもの（岩波文庫所収のもの等）[2]がある。この作品は全二十回（初刊本では十七分冊）に及ぶ長編であるが、初刊本では第四回の部分に黒く塗りつぶした部分がある。『明治文学全集　坪内逍遙集』では75ページ下段24行めから76ページ上段10行め「近きころ某がいはれし言葉に。官員は娼妓と一般。一トたび官員となりたる時にはぬくこといと〳〵難し。其故はいかにといふに。官員となれば如何程にても。金を貸すものが多かるから。自然に借財が殖行く譯なり。而して免職となる時には。四方八方の高利貸が。皆催促に来る事ゆゑ。いやでもおうでも官員をばゞ。止める譯にはゆかぬといはれき。げに然事もありけんかし。」の部分である。

この部分は、大正十五年刊『明治文学名著全集』所収本文において復原されたとされる部分であるが、初刊本第一主義の立場からすると、この黒塗り部分の存在は頭の痛いところである。日本近代文学館の『当世書生気質』初刊本の複製が、全編にわたるものではなく第一回までの部分にとどまったのも、あるいはこの黒塗り部分の存在が災いしたかと思われる。

一方、『逍遙選集』の方の本文は、初出本文との間にかなりの異同がある。（『当世書生気質』のほかにも、例えば、明治期前期の口語資料として重要な作品である『雪中梅』では、初出本文と講談社版『日本現代文学全集3　政治小説集』所収の「訂正増補」本文とではかなりの違いがあり、後者には「発端」部以下、ほぼ全面的に「訂正増補」が加えられている。）『逍遙選集』所収の『当世書生気質』には、かなづかいや送りがな、異体字などの漢字の書き換えや漢字

表1 （[9]、[11]、[12]、[16]、[17]、[19]、[20]、[24]〜[28]の12ケ所が会話中の例）

	初刊本（昭和女子大学所蔵本）		逍遥選集	
①	小言といひまた非評もいはれたりき	はしがき表6行	小言をひ、また非評もいはれたりき	3頁3行
②	作者の血大の眼を聞きて学生社界の是非を批評し	はしがき裏4	作者は血大の眼を聞きて學生社界の是非を批評し	3・13
③	無為に半額は費へつべく。されども	一丁ウ7	無爲に半額は費えつべし。されども	10・6
④	国家の為にもあつたらしき。御損耗とぞ思はれける。	一ウ11	國家の爲にはあつたらしき。御損耗とぞ思はれける	10・10
⑤	おもひも。寄らない幕。	一ウ13	おもひ寄らない幕。	10・12
⑥	言語恰好。まづ素人の鑑定では	二オ12	言語恰好、素人の鑑定では	11・10
⑦	紅はげたれども	二ウ9	紅は剝げたれども	12・4
⑧	世間に通じぬ	二ウ13	世間に通ぜぬ	12・7
[9]	仲間へ這入んな	三オ7	仲間に這入んな	13・1
⑩	妙なところに	三オ11	妙なところへ	13・4
[11]	それやア	三ウ2、七ウ4	そりやア	13・9、18・12
[12]	喰ちらかしをする	三ウ4	喰ちらかしする	13・11
⑬	いと明にぞ知られける。	四オ6	いと明にぞ知られたる。	14・10
⑭	其服装をもて考ふるに。	四ウ7	其服装をもて考ふれば、	15・9
⑮	府下のチイ官吏のサン〔子息〕ならん歟。	四ウ8	府下のチイ官吏の子息でもあらん歟。	15・10
[16]	父上の命令	五オ3	父上の命令つたこと	16・3
[17]	おつかけなはる	五オ10	おつかけなさる	16・10
⑱	角をこせへて見せる	五オ12	角をこさへて見せる	16・11
[19]	お目に懸つたからてつて	六ウ6	お目に懸つたからッて	17・4
[20]	しますから	六ウ8	しませうから	17・6
㉑	斯くとはしらぬ	六ウ14	斯とも知ぬ	17・11
㉒	せりたてられて	七オ2	せきたてられて	17・13
㉓	目にかよはする相互の真情	七オ3	目にかよはせる相互の眞情	17・14
[24]	何處かへ無して	七オ6	何處へか無して	18・2
[25]	残つて居たのか	七オ8	殘つて居るのか	18・4
[26]	ラブ〔愛〕して居るぞう	七オ14	愛して居るぞ。	18・9
[27]	馬鹿ア言ひたまへ	七オ14	馬鹿を言ひたまへ	18・9
[28]	松の木の下へ酔倒れて	七ウ3	松の木の下に酔倒れて	18・12

の読みの変更、句読点の位置や記号の変更など、第一回までの部分にだけでも数百ヶ所に及ぶ変更がみられるが、それ以外の、語句まで変更したものも、第一回までの部分にだけでも28ヶ所ほどみられる。（表1参照）（なお、9、11、12、16、17、19、20、24～28の12ヶ所が会話中の例）

例えば、初刊本五丁表10行め、芸者の小年の会話、

○貴方があんまり烈しく。おつかけなはるもんだから

は『逍遙選集』本文では、

○貴方があんまり烈しく、おつかけなさるもんだから

と直してあり、「なはる」より、より東京者らしい感じを与える「なさる」を選ぶなど、より適切な表現を選ぼうとする作者の意図が窺われる。

しかし、『逍遙選集』は昭和二年の刊行であり、明治十八年の資料として扱えるかというと疑問が残る。やはり資料としては初刊本を第一に考えるべきであろう。

本稿では初刊本本文を中心に検討するが、黒塗り部分のある第四回以降は、今回はとりあえず対象からはずし、第三回までを対象にして報告、考察を行う。

三、漢字の字体について（旧字体と新字体）

『明治文学全集』所収の『当世書生気質』本文の漢字の字体には、旧字体が多く用いられている。漢字の字体の伝統を重視する立場だと、「近代作品の本文中の漢字は旧字体」という方針が校訂作業の中で示されるのも理解できなくは

ない。

しかし、近代語研究者の立場からすると、初刊本で、旧字体でなくいわゆる新字体が使われているならば、それはそのままの字体で示されるのがより望ましいと考える。

第三回までの範囲だと、例えば「懐、戯、旧、真、豊、来」といった字である。それぞれ「懷、戲、舊、眞、豐、來」という字体は使われていない。

1 懐中時計 （十四丁裏13行）
2 春のやおぼろ戯著 （一丁表2行）
3 旧幕の頃 （二十四丁裏4）
4 真成に （三丁表14）
5 小娘なり。其名をお豊といふ （十五丁表10）
6 集ゐ来る （一丁表11）

このほか、「縁、清、即」なども、旧字体ではなく新字体が用いられている。また、「声」の場合も多くの場合、「聲」は使われてはいない。「第一回では「声」は五例、「第二回」では七例用いられているが、「聲」は用いられていない。

7 失敬の挨拶は。ゴッサイの掛声に和し （一丁裏2）

(ただ、「第三回」では「声」一例のほか、「聲」が二例用いられており、「声」か「聲」かというこだわりはそれほどなかったようにも思われる。)

初刊本本文、『明治文学全集』本文共に新字体となっているものもある。たとえば「塩、効、窃、双、体、万」といった字である。(それぞれ、『逍遙選集』所収本文では「鹽、效、竊、雙、體、萬」となっている。)

8 其源因の關係塩梅　(一丁裏12行、『明治文学全集　坪内逍遙集』では60p上段12行)
9 自然の効用のなからずやは　(はしがき裏9、『明治文学全集』では59p下4)
10 盗跖が窃盗のすてきな材料にもなりし　(はしがき裏4、『明治文学全集』59p上17)
11 結句双方相照して　(二丁裏11、『明治文学全集』60p下20)
12 此容体にて續かむには　(一丁裏9、『明治文学全集』60p上8)
13 人力車夫と學生なり。おの〳〵其數六万とは　(一丁表12、『明治文学全集』59p下20)

このように、旧字体にこだわらず、いわゆる新字体にしているものもあるのだから「縁、懐、戯、旧、真、清、声、即、豊、来」なども初刊本本文に基づく字体で表すことが出来なかったかと惜しまれるところである。(『逍遙選集』ではそれぞれ旧字体となっており、それを重視したのなら、それはそれで納得できるが、『明治文学全集』解題には「初刊本によった」としか記されていない。)(先にも述べたように近代語研究者としての感想であって、文学研究者としての立場からは違った見方もあるであろうが。)

さて、初刊本の表記を重視すると「旧字体よりも新字体」となるものがあることを述べてきたが、明治前期において

既に、旧字体にそれほどこだわっていないという様子が見られるならば（もちろん、これは刊行に携わった者の気持ちであり、著者自身の気持ちはまた別の所にあるのかもしれないが）、新字体が社会的にすっかり定着している現代において、例えば「真」ではなく「眞」というように旧字体にこだわる理由がどれほどあるのだろうか、と人名における旧字体表記を見るたびに感じてしまうのが私の気持ちである。

四、『明治文学全集』における校訂ミス

今度は、「旧字体と新字体の違い」以外の、初刊本本文と『明治文学全集』所収本文との違いを見てみる。（表2参照）

このうち、②の「いがめしき」、⑩の「たうそう」、⑫の「たんご」、⑭の「てんぺん」はそれぞれ「いかめしき」、「たいそう」、「だんご」、「てっぺん」の誤植と考えられ、特に校訂を問題とするには当たらないだろう。また、⑥の「くろうしょう」もその直前の四丁裏1行めの用例では「くらうしょう」となっており、校訂は妥当な所かもしれない。⑬の「よっぽと」も濁点が落ちていると考え、「よっぽど」とするのが妥当な所か。

しかし、他の9ケ所の校訂には問題がある。

①の「さえ」だが、他に「はしがき」の部分に2ケ所、第一回に1ケ所用いられているが、その部分は初刊本・『明治文学全集』共に「さえ」となっており、①の部分でだけ『明治文学全集』で「さい」としているのはケアレスミスであろう。（『逍遥選集』では全例「さい」となっているが。）⑦の「ねがひさげ」が『明治文学全集』で「ねがいさげ」となっているのも同様のケアレスミスと考えられる。

表2　初刊本（昭和女子大学所蔵本）本文と『明治文学全集』本文との校異

1.「はしがき」～「第一回」

初刊本		明治文学全集		逍遙選集	
①才（さえ）	はしがき表6行	才（さい）	59頁上6行	才（さい）	3頁4行
②いが｜めしき	一丁表8	いか｜めしき	59下15	いか｜めしき	9・7
③成らずハ｜	一丁裏8	成らずバ｜	60上7	成らずば｜	10・7
④さらずバ｜	二オ7	さらずハ｜	60上24	さらずば｜	11・5
⑤ならずば｜	二オ10	なさずハ｜	60下2	ならずば｜	11・8
⑥苦労性（みうしゆう）	四ウ5	苦労性（くらうしゆう）	62上13	苦労性（くらうしゆう）	15・7
⑦願下（ねがひさげ）	七・ウ2	願下（ねがいさげ）	63下6	願下（ねがひさげ）	18・11

2.「第2回」

初刊本		明治文学全集		逍遙選集	
⑧セブン〔七（しち）〕に｜	九ウ11	セブン〔七〕へ｜	65上9	七（セブン）へ	22・11
⑨弊袍（へいほう）	十ウ7	弊袍（へいほう）	65下13	敝袍（へいほう）	24・2
⑩大層（たうそう）	十五ウ13	大層（たいそう）	68下20	大層（たいそう）	31・8

3.「第3回」

初刊本		明治文学全集		逍遙選集	
⑪被ふるした｜	十八ウ11	被ふるしだ｜	70下8	被ふるした｜	36・3
⑫團子（だんご）	十八ウ12	團子（だんご）	70下9	團子（だんご）	36・3
⑬よつぽと｜	二十三オ1	よつぽど｜	73上2	よつぽど｜	41・8
⑭頂上（てんぺん）	二十四ウ8	頂上（てうぺん）	74下9	頂上（てうぺん）	44・7
⑮不思義｜	二十五オ11	不思儀｜	74下11	不思議｜	45・7

⑨の「へいぼう」を「へいほう」としたのも、『逍遙選集』では「へいばう」とされているだけに問題がある。⑮の「ふしぎ」であるが、ここはやはり初刊本通り「不思義」として欲しかった所である。（『逍遙選集』にならい「不思議」と校訂するのも考えられないではないが。）

一方、⑧の例は次の箇所に出てくる。

⑧セブン〔七（しち）〕にポン〔典（いれる）〕した歟。セル〔賣（うる）〕したに相違ない。　（九丁裏11）

「セブンに」を『明治文学全集』で「セブンへ」と校訂したのは、『逍遙選集』で「セブンへ」となっているだけに考えられなくはない。しかし、「セブンに」で十分文意が通じるのだから変更する必要はなかったのではないか。

次に、③～⑤の例である。

③學もし成らずは死すともなど。いふた其口で　（一丁裏8）
④銀行の取締歟。さらずば米屋町邊か　（二丁表7）
⑤銀行の役員ならずば。山の字のつく商人なるべし。　（二丁表10）

明治十八年当時、東京語では「ならずは」の形よりも「ならずば」の形が多く用いられていたと考えられる[3]ので、用語の統一という意味でなら③を「成らずば」と校訂したのは納得できる。（もっとも初刊本通りの形にされていたほうが、近代語研究者にとってはありがたいようにも思われるが。）しかし、それならなおのこと④・⑤をそれぞれ「さらずは」

「ならずは」の形にしたのか、理解に苦しむ所である。

⑪の例は次の箇所のものである。

⑪其羽織は親父から貰つたので。品柄はわるくないが。何にしろ被ふるしたから。そんなになつたのサ
（十八丁裏11）

ここの例も初刊本・『逍遙選集』共に「被ふるした」となっているにもかかわらず、『明治文学全集』では「被ふるしだ」とされている所である。濁点を加えただけだが、「た」が「だ」にされ、「動詞」が「名詞」に変わってしまい、文意もかなり変わってしまう結果となった。

さて、『当世書生気質』も近代口語資料として見るなら、「会話部分だけを扱う」という考え方が妥当なものかもしれない。とすると表2のうち、①～⑥は対象外となる。しかし、⑦～⑮は会話中の例であり、依然としてかなりの問題が残るわけである。

ここまで見てきたように、不用意な校訂がこれだけ見られる以上（「第三回」まででこれだけ問題があると全二十回分だとかなりの問題があると想像される）、『当世書生気質』は近代語研究においては、『明治文学全集』所収本文に当たるだけでは不十分で、初刊本を参照することが不可欠のように思われる。

しかし、一・二節でも触れたように、『当世書生気質』の初刊本の複製は第一回の部分しか刊行されておらず、研究者の誰もが初刊本を手元に置いて研究するというわけにはいかないのが現状である。逍遙の『小説神髄』の方は初刊本の複製が刊行されているのだが、こちらは近代口語資料とはならない。

『当世書生気質』と同様、明治前期の口語資料として重要なものである『雪中梅』の方は、初刊本の複製本が刊行されている。先に触れたように、『当世書生気質』初刊本には第四回の部分に黒塗り部分があるなど、頭の痛い問題もある。けれども、『当世書生気質』初刊本は近代語研究にとって不可欠なものであり、その複製本の一日も早い刊行が望まれる。

五、まとめ

1、明治前期の口語資料として最も重要な作品の一つと考えられる『当世書生気質』の場合、初刊本の複製が最初の部分しか刊行されていず、研究においては初刊本によっているとされる『明治文学全集』所収本文等に基づいて行われているのが現状だと思われるが、『当世書生気質』の『明治文学全集』における校訂は問題が多く、研究においては初刊本を参照することが必要である。

2、近代語研究者が手軽に初刊本本文を参照することが出来るように、初刊本の複製本の、一日も早い刊行が望まれる。

注

(1) 例えば、小松寿雄「『一読三歎当世書生気質』の江戸語的特色」(昭49、有精堂『論集日本語研究　現代語』所収)ではテキストを『明治文学全集』にしている。

(2) 進藤咲子「漢語サ変動詞の語彙からみた江戸語と東京語」(昭38、有精堂『論集日本語研究　現代語』所収)では岩波文庫本によっている。

(3) 吉川泰雄「『善くば』『為ずば』などの濁音形について」(『近代語誌』所収)、小松寿雄『江戸時代の国語　江戸語』等参照。

(ますい・のりお/専任講師)